

塩

九

四十八

庫文官政			
		一	和
		一	書
		四	
		九	
六	五	二	一
冊	架	函	號

庫文閣内			
		一	和
		一	書
		四	
		九	
二	二	二	一
函	冊	架	號

内閣文庫	
番號	和 11497
冊數	65 (48)
函號	211 302



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







元陳繹曾文章歐治明胡應麟詩菽等皆

爲文作詩規矩也

復系敦厚周也撰茂雄深漢也凡華秀於唐

也三代政事俗習亦各加之云詩菽

周漢唐以降各代其政之沿革一代之始先

隋代此凡於存亡之時主與臣別以て民が

まに隨凡何々々々俗亦々々政事大に若に

不似況も幾れは采一て假一から種族入り

四十八

西一二七九〇號



中國にまゝの國政をたもたぬや自らは  
て已らむとす所と是とて先代と雖も  
これに習て亦各凡と多岐有る傳漢  
かゝる事なり

裂周而王者七國也周漢而統者六朝也  
若五代也七國不可以比漢六朝不可以  
比唐五代不可以比秦  
木云

凡時運常なり以て世代其多とて  
有る事なり

何んか白河の白河の累なり次是幻乃  
忘る或と會て或は終に恨と怒と争ひ  
静なりはつとて國に民の山を  
太古力く日長く少年に  
と破念のたぬに  
凡葉終に古詞吟  
事と自孤月意は  
立休乃後水如に  
と春



雲伴斬虹山降晴

川邊若葉秋声輕

火々蒸爲所新燈曉

短折採蓮三四莖

忠意乃人心

いかに世の人心なるをさるるもさるる夏の如く何

・今茲由申是れ知以來諸國疫疾流行して是る多

く我尾南越由は海也餘は北至死之するもの多

く此の如く五日の末に病に即ち一々の多入と

く一研明の如く醫に命して是を施さるる

・さしやうとや東海迄乃し江都此の如くありし

く名とえくはるる疫の起るるもの多

漢方病の如くは肉店より初を又しは

市井に満ちて是も死胎の臭気種穢積る

此病氣の如く人よやれと死せしむるは彼

佛死多しを必疫病也といふ程也

若くは食之しては付はるる病也といふ

ゆゑに其病を治すは掃蕩の如く凍解







修行厭離心家して... 穢染を  
いせふらん

けしうしほとくをひきかきおのりて... 穢染を

。外道四鬼道每福師

人死神威更無來生是云也

聖教無言乃心神無門是云聖教

方也苦空皆天竺書是云他因

諸法自然名中用是云無用

安師云業報理徹通人者味思不能及邪鬼足興云  
年一と後かひりし入る

いふは... 穢染を

いふは... 穢染を

いふは... 穢染を

。或は上人云信花の如も善淨二門昔也川一かへは

淨高れを意とて一徹他は有りたれと後了るを

いふは... 穢染を







丁酉

鎮二場凡月 決心満露業 海言燥進也

呼言言也

天然心老人 初下せしむる  
のふしとさうも 文をよめりて  
やうしむるも おくもさうも

西語言我回思思露 女秋若露言使入巻

丹今推見は村力 八十餘年一夢秋

9 或列若王子社ハ王子村に在リ 幕府此御居進に

つし神等もつし作しに金助此形池と畠は

供作人全輪言 社此聖に寺場の社有信言ハ御殿也

つし此也上の西南流に推有り日本橋らし

はりて二言

平協と推ありは大進物の 場堰有り正保

三年十一月十三日 勸新らに後御あり

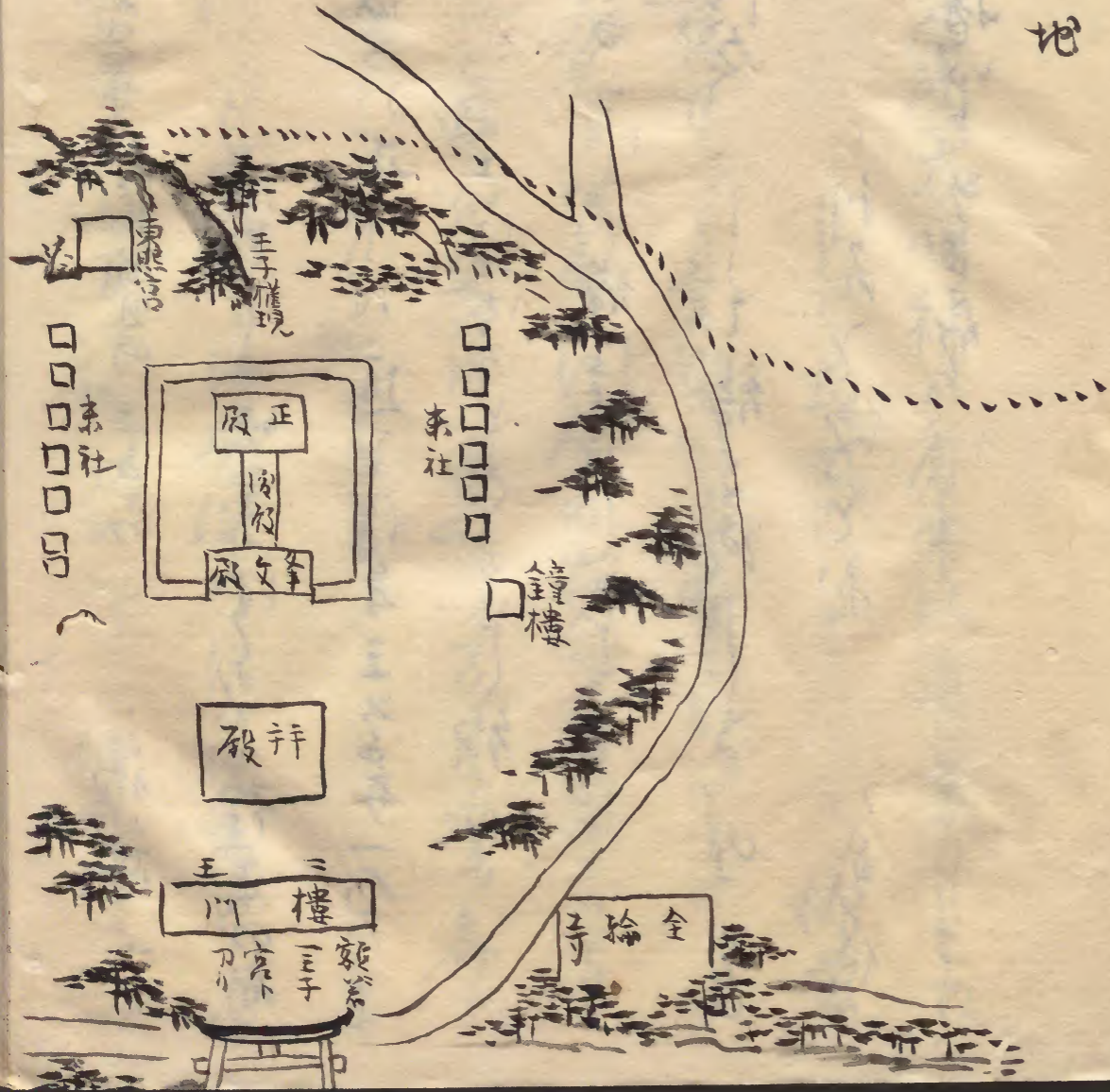
薩品候焼た進よと行し 火も燃



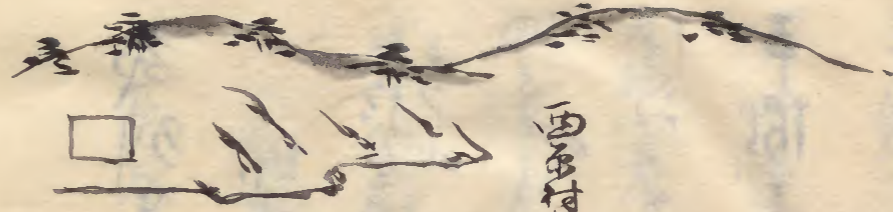
東



地

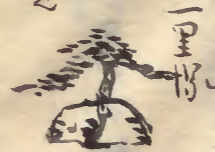


御殿山



西

大宮御道



いんせいせき



徳川氏... 徳川氏... 徳川氏...  
 書... 徳川氏... 徳川氏...  
 徳川氏... 徳川氏... 徳川氏...  
 再... 徳川氏... 徳川氏...  
 徳川氏... 徳川氏... 徳川氏...  
 徳川氏... 徳川氏... 徳川氏...

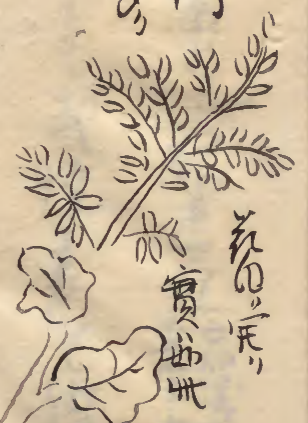
武列水川六所大明神ハ府中に鎮座す...  
 團の惣社一宮にして武内ノ官社也 柳...  
 五月五日の節神事ハ人の出入り...  
 上野園に社... 伊香保の...  
 系に... 伊香保の...







上品の西木魚油  
7月7日世多あり  
あり



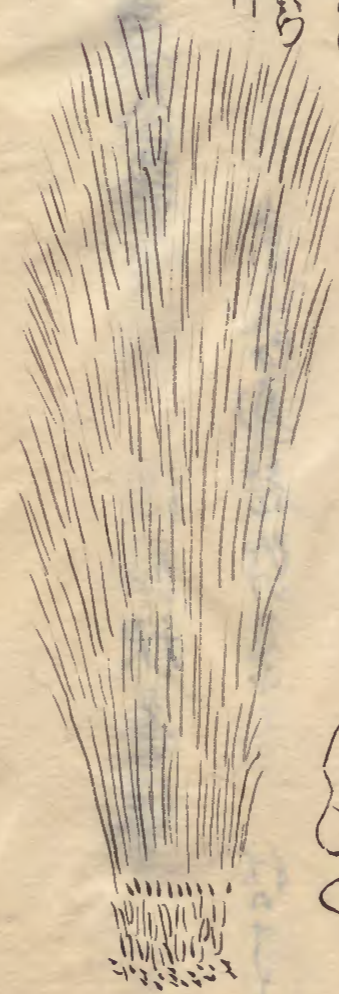
蘇の葉

葉は二葉の似たり  
日本名は...  
或は...  
西...  
ナ...

又...  
...  
...

又...  
...

春の...  
...



林...  
...

...

...

...

...

...

...



枕と醒來夢の片時

右側 同絶業蝶也

人可甲子國書院蔵

何要心也

諸別は因言事跡を立寄りし事此其の少くも  
 富一と雖も其情多に記しし所は此月半  
 けたるとも人の孤枕の如月に感懐して好し  
 花紅葉向秋一と情と遺物と亦其の如く  
 此は其大部の事務繁甚多に記しし事其  
 事記しし事此の如き其部俗に記しし事

此の如くは、且儒士文家其多に記しし事  
 其の如き其部俗に記しし事一人二人の如く  
 同の如くは其の如き其部俗に記しし事  
 他に其の如き其の如き其部俗に記しし事  
 川乃内は其の如き其の如き其部俗に記しし事  
 其の如き其の如き其の如き其部俗に記しし事  
 其の如き其の如き其の如き其部俗に記しし事







は長あうしこく昔しとまらるるもめなるる大地し

より一國難くぬらう我はあふりし滝五の宮

ありしものあふりのぬらうとあふりしと色あふり

うらむあふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

四岸正統志に記するあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

あふりしとあふりしとあふりしとあふりしと

果ては深しは深しとあふりしとあふりしとあふりしと

とあふりしとあふりしとあふりしとあふりしと







菱の葉のよりの水邊を流る由のしるし  
しるしのかみむらさき

或はたしるしの葉のよりの水邊を流る由のしるし

菱の葉のよりの水邊を流る由のしるし

、兼丹東の乳浮れり都に一人投りしきぬる

たにしるしの水邊を流る由のしるし

しるしの水邊を流る由のしるし

しるしの水邊を流る由のしるし

又まはしるしの水邊を流る由のしるし

都にありしりるしの水邊を流る由のしるし

しるしの水邊を流る由のしるし

しるしの水邊を流る由のしるし

参上向別給或陵秋 落葉物為我不保

十有二年月前より 実存連法台林末慈

あつきの水邊を流る由のしるし

しるしの水邊を流る由のしるし











かひのなきもさしとまはにきとほしほとほつる

半醒醒ましん 覚無し人多く目覚め夕陽如き高偏信也

言明之除害手 ことかき海にまひりし 言明之除害也

多るをいふは假借指にさえし けりしれはせしん

けりしりし 春のまよと座して秋まぬ文月や涼し

くもるまよつりしりしるる

竹音橙意白

秋静吊関情

袖手一瓦裏

初王眼也縁輕

あささき夜の風のほしほしめゆら夜のまよる

野田素比に供一孤枕涼月の微なりゆりぬる

しほ静梅もれ上人をほりてまよつてせしめ

あささき けりしりしるる

あささき けりしりしるる

まよるのまのまのこ

あささき けりしりしるる

あささき けりしりしるる



雅の書からあつたもの。そのまゝの原稿の影をうつして

君のまゝの影をうつして

君のまゝの影をうつして

。我國の歴史は此の如きものでありて、其の如きものありて

出立の準備がなされし頃、其の如きものありて、其の如きものありて

子書に、心算の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

。そのまゝの影をうつして

。其の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

。そのまゝの影をうつして

。其の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

。其の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

。其の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

。其の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

。其の如きものありて、其の如きものありて、其の如きものありて

世宗向各軸同

丹書使人用顔

鋪張新陽臺

何讓他樹照山



新海見書いぬるに、各書と有るは、終いとし  
海軍に、一、抄行の事、終、也、此と、海軍に、  
と、海軍に、人の、所、所、の、大、祭、の、事、也、

六月廿四日有、三、章、の、御、遺、物、の、後、の、事、也、  
一、我、の、一、の、御、遺、物、の、御、代、の、事、也、  
二、我、の、一、の、御、遺、物、の、御、代、の、事、也、  
三、我、の、一、の、御、遺、物、の、御、代、の、事、也、

御、代、の、事、也、  
御、代、の、事、也、  
御、代、の、事、也、  
御、代、の、事、也、

七月朔日、辛、未、の、改、元、の、事、也、  
宮、中、の、事、也、

六月廿二日、議、事、の、事、也、  
議、事、の、事、也、  
議、事、の、事、也、

今日、今日、の、紀、候、御、相、續、の、事、也、

御、代、の、事、也、

同日、同日、の、事、也、

正徳、改、元、の、時、先、内、々、に、事、也、

正徳、改、元、の、時、先、内、々、に、事、也、



いさくふれいふとせしと 荒丹御後天橋

川橋新造のしー正のまふとと 忌ふと正月

乃名加何と云一 故事定めて改えの式あり

一ととせぬと共元年以是打結也とととと

ゆりし 皇元決水交裁謹夜夜のり 又樹雨を 改幕下

御執事のりくえんと 執事あり人

勅文曰流文 享子茲及命の保者万國

屋同書 勅命奉承成神橋大橋長義師

。文月四日卯のつゆり祥徳人三千三年乃を結し

佛事ありむれいゆりくととに

暁桐和翠樹 鳴多塔 秋又 二子之回夢

菊花又一新

初五の凡経声立里子二十七回の高石いーと

法場に音もつと

むーと山出村の社の志はれぬ袖は高き







山内出雲守 官替副使 結城右衛門尉 外替副使 青木継政也

敬言三つ大名

勅使 溝口信濃守 法皇使 毛利国房守

女院使 太田飛騨守 二條内府云 備前守

一條亞相守 誦福無厭守 代り 細川隆光

御中

井上河内守 大久保長門守

高野御使 高松少將 頼 白田山侍従 下給守

星夕乃、海客全振の業、とらへて、

御中

御中

二

御中

御中

御中

御中



のばしきり野山の菊を走らして一箇場の  
古きと書きしとあり

種冊にこそしつ物なる書

古今の文は亦直ら、田代南無とておかし  
ふとていへし、かゝる人々、のちのち、  
しるるに、今止しに、  
ゆかり、  
しるるに、  
ゆかり、  
しるるに、

と流し、  
は流し、  
あはれ、  
あはれ、  
あはれ、  
あはれ、

尾刈執事田南新宮の流し、  
流し、  
流し、  
流し、







推しよとくしよの秋の水鶴以子筆を宗三に  
らるる思ひ蓮華の舟は又こゝろに

満池紅錦散秋葉 中序 秋夜流槎夕涼

玄紀西宮高宮神園 香芝莊嚴妙善場

池邊山飛と暮りり人皆皆たそくそと暮る  
秋夜秋も高宮孔愉と暮りりくぬく同枕  
ら古るく中夜くそくそと暮りり回音紙の  
と街と遊々たるくは細と解成湯の祝

奥と高子差く何と心け山に園に秋傷と中

とせり也

西宮高宮神園の欄と指

蓮風露華下 旅懐自領情散靜

昔月雨露舟 庭裏下 意心地清

りー折し人の亭に所て故園と懐情と

學凡荷為先 鼓笛認同遊 他境月千里

海川心上秋



此人多矣... 或言... 一... 野海藏... 向者... 塵尾... 本欲... 法之... 詩曰

向者造... 塵尾... 本欲... 法之... 詩曰

詩曰

金錫... 華...

孤... 世...

秋七月... 信景

和

密山元顯

單... 秋...

薄... 謝...

謝... 身...



和清原主人採蓮詩

枝成錦簇一詩中

疑是蓮花照水紅

千里相思武陵月

柳心終處只秋風

武元天皇采蓮詩

五川

五川之水清如鏡

三野里

三野里之水清如鏡

採山

採山之水清如鏡

三野

三野之水清如鏡

世園

世園之水清如鏡

我神龜東國八列

居散何處の由と

等義と鎌倉に

やめくしに

為のいかに

一いつ徳人







政令と布多し一々一田園自其家して御佳  
と候一々一凡昔と一々一續れ一々一  
一々一其家より一々一陸奥より一々一  
海を渡る一々一郡令其一々一信濃の一大  
道其往の壯觀あり万由兵と一々一斬と  
一々一其一々一先をせし一々一ぬ其一々一  
其一々一田園の地と一々一其一々一即  
其一々一田園一々一

一々一其一々一其一々一其一々一其一々一  
今太平の因は一々一其一々一其一々一  
以候一々一其一々一其一々一其一々一  
仰一々一其一々一其一々一其一々一

神宮の仰は田園の  
地と一々一其一々一其一々一其一々一  
一々一其一々一其一々一其一々一  
一々一其一々一其一々一其一々一



と國事金と白く陰陽のありのい  
くく崔山にまはして世をさして東方  
れ兵とあはれりるしと名色の土面行の  
東に地何しとれり人し欲とあはれん言は  
んかた殿とあはれんとはれり  
の陰陽をさし申はれり  
まはれり  
の大神とあはれりるしと名色の土面行の

下島の智をさしんや  
若園夜活ホト意とあはれん言はれり

。 津井夢花あはれりるしと名色の土面行の  
同屋葉おしろいせうり

山石石女園  
あはれりるしと名色の土面行の

あはれりるしと名色の土面行の











世にあらんかきしるすも

同くはるる

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

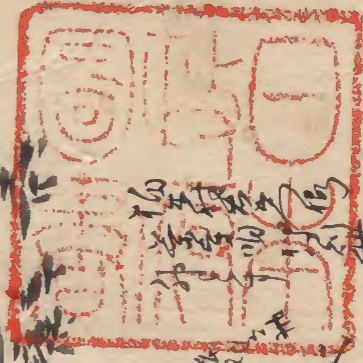
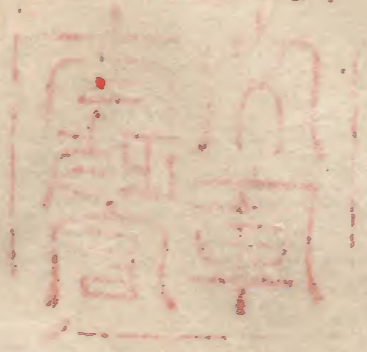
あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

あつたてのうらなひを

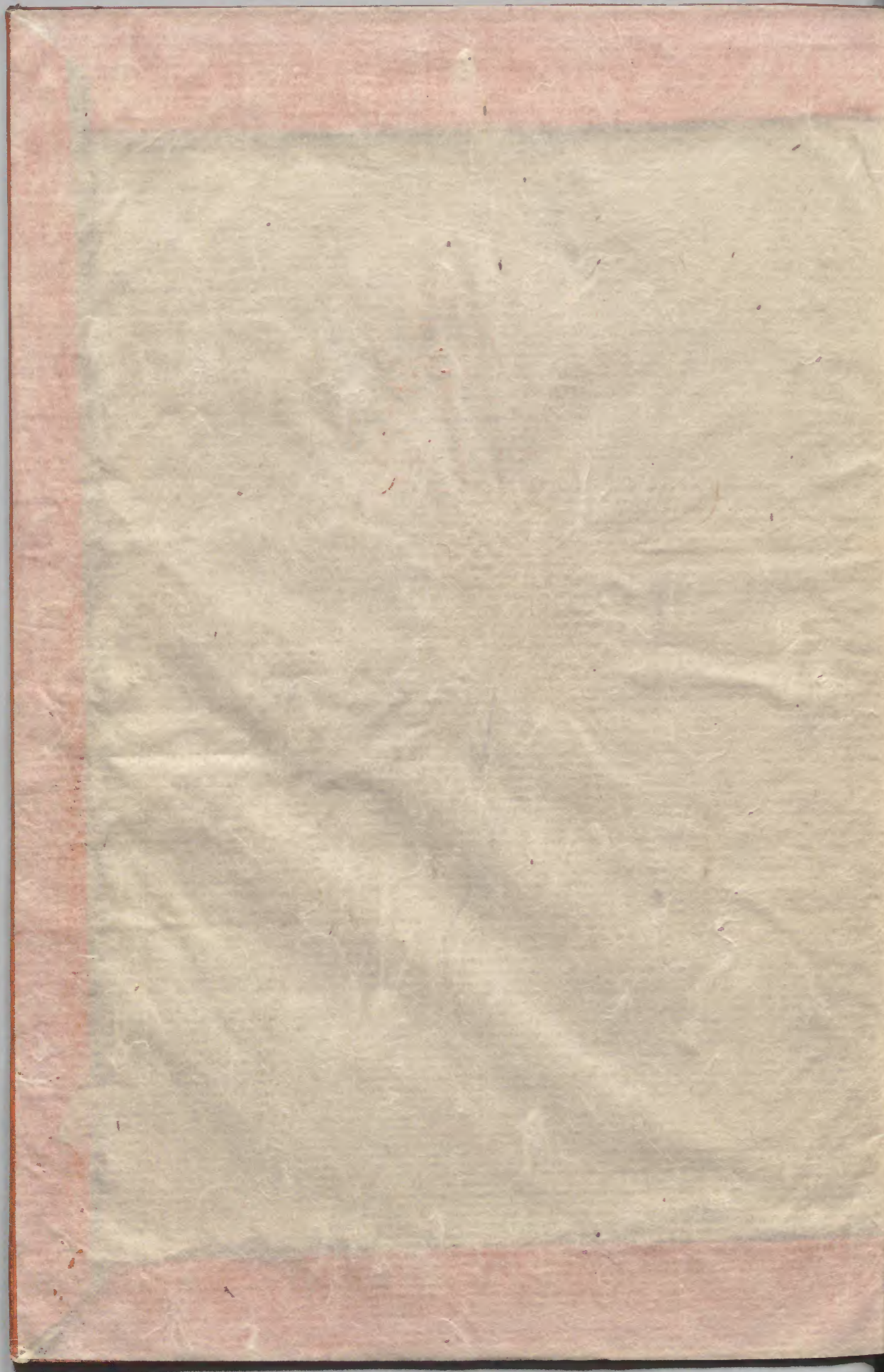




護国寺

Handwritten Japanese text in cursive script, written vertically on the right side of the page. The text appears to be a description or commentary related to the drawing, mentioning '南' (south) and '西' (west) directions.





Two red square seals are visible at the top of the page. The seal on the left contains the characters "高島" (Takajima) and the seal on the right contains "内庫" (Nokurō). Below the seals is a faint blue ink drawing of a tree with a central trunk and several branches. To the right of the tree, there is vertical Japanese text: "高島内庫" (Takajima Nokurō) and "高島内庫" (Takajima Nokurō). Below the tree, there is more vertical text: "高島内庫" (Takajima Nokurō) and "高島内庫" (Takajima Nokurō). At the bottom right, there is a small red square seal.



